

## 加藤 茂 他、『芸術の記号論』、勁草書房、1983年、291 p

## 絵画の解釈と記号論（谷川 渥）

## 一 絵画と言語 前史的展望

## 1 伝統的模倣論と姉妹芸術論

ex. 「実物を見れば苦痛を覚えるようなものでも、(…)それをこの上もなく正確に模写した絵などであれば、我々はみんな喜んで眺める」(アリストテレス『詩学』4. b 10-12)

ex. 「原物は誰も感心しないのに、絵になるとなかなか似ていると試してみんなが感心する。絵というものはなんと空しいものだろう」(パスカル『パンセ』134)

類似性の原理に支えられた幻像 模倣の二元論 プラトン『国家』(10.602 c) (p.106)

ex. 「絵は黙せる詩、詩は語る絵」(シモニデス): 「詩は絵の如く」(ホラチウス『詩法』)  
詩法における絵画的描写、視覚的明瞭性の概念が、絵画の芸術的基盤の強化と共に、絵画における詩的内容の要請へと変容 絵画と言語とのある種の関係の存在 (p.109)

## 2 芸術と言語との類比

\* カント (Immanuel Kant : 1724-1804) による芸術と談話との類比

: 言語による美的表現: 語 (Worte)、所作 (Gebrärdung)、語調 (Ton)

: 芸術: 言語芸術 (redende Kunst)、造詣芸術 (bildende Kunst)、感覚の遊戯の芸術

(Kunst des Spiels der Empfindungen)

ex. 「芸術家の精神は、形態を借りて、彼の考えていることとその考え方に形態的表現を与え、こうして事実そのものにいわば身ぶり言葉で語らせる」(『判断力批判』)

この類比での言語は自然言語ではなく、身ぶり言語による類比にすぎない (p.110)

\* クローチェ (Benedetto Croce : 1866-1952) による言語の哲学 (言語学) と芸術の哲学 (美学) の同一化

: 直観と表現を同一とみなす: 芸術は直観的 = 表現的認識であり、また言語も表現であるから、両者は同一 (Cf. 『表現の学および一般言語学としての美学』)

芸術は表現であるとするトートロジー (p.111)

## 二 記号学

## 1 記号学的方法の生成

\* ソシュール『一般言語学講義』&バルト『記号学の原理』

\* バルト「記号をめぐる想像作用」(1962) in 『エッセ・クリティック』

: 記号が前提する三つの関係

: シニフィアンとシニフィエとの内的関係 シンボルに明確化

象徴的意識: 記号を深さの次元において見る

: 記号と他の記号との潜在的な範列的關係

範列的意識: 二つの記号の形相を相同的な関係において規定する: 喚起の力学

: 言説内における記号間の連辞的關係

連辞的意識: 記号連鎖における拘束、許容、自由に関する意識: 諸部分の配列の力学

Cf. ヤコブソン「言語活動の二面と失語症の二つのタイプ」(1956) in 『一般言語学』

隠喩型: 連合: 相似性に基づく選択の次元

ex. ロシア抒情詩、ロマン主義、象徴主義、シュルレアリスムの絵画、チャップリンの映画(フェイドアウト、インを多用)、フロイトの夢の「象徴化」

換喩型: 連辞: 隣接性に基づく結合の次元

ex. 英雄叙事詩、写実主義の物語展開、キュービズムの絵画、グリフィスの映画(クローズアップ、アングル変化を多用)、夢の「転移」あるいは「凝縮」(p.116)

## 2 記号学的方法の批判

\* デュフレンヌ (Mikel Dufrenne : 1910-) 「芸術は言語活動か」(1967)

: 三つの記号学的領野

・ 言語学的な場・意味作用の場であり コードとメッセージが密接に関連

- ：超言語学的な場：表現の場：メッセージの伝達はあるが、コードは希薄
- ：下言語学的な場：情報の場：コードはあるがメッセージはない
- ：芸術は超言語学的なものの代表である
- ：芸術におけるラングの否定
  - ラングは大衆に支えられているが、芸術は個性的な芸術家個人に委ねられるため
- ：芸術を言語活動として考察するとき、芸術を言語活動によって理解しようとするのではなく、逆に言語活動を芸術によって理解しようとするべきである (p.120)
- デュフレンヌの主張：芸術の本質は意味作用ではなく、表現である：クローチェ説に近い

### 三 絵画の記号学

#### 1 絵画の記号学の原理

- \* マラン (Luis Marin) 「絵画の記号学のための要理」(1968) in 『絵画の記号学』  
別紙参照

#### 2 絵画的なものの記号

- \* パスロン (René Passeron : 1920-) によるマラン批判
  - ：絵画の記号学の問題は、仮説や理論、すなわち一つの学の新しい領域への適用の言葉によってではなく、仮説以前の、その固有の領土から生まれるはずの観察の言葉によって提起されるべきである (「絵画的なものの記号学への制作学の寄与について」1976)
  - マランの試みは「絵画の記号論」ではあっても、「絵画的なるものの記号学」ではない 絵画的品質の回復 (p.129)
  - ：人がタブローを読むのは、ただそれがもはや自分を感動させないときだけである 語りえぬものについては沈黙せねばならないのか？
  - パスロンは絵画的なるものの存在を主張しているだけ (p.131)

#### 3 画像の記述

- \* マラン「イメージの記述」(1970) in *Communications No. 15*
  - ：プッサン (Nicolas Poussin : 1594-1665) 「蛇のいる風景」をめぐる五つのテキストを取りあげ、見うるものと読みうるものとの絡み合いの織物を作り上げる試み

### 四 イコノロジー

#### 1 イコノロジーの生成

- \* リーパ (Cesare Ripa : 1560-1623) 『イコノロギア』(1593)
  - ：形象的ならざる様々な抽象的観念の視覚的形象化と説き、とりわけ抽象的観念を女性像によって寓意化し、その衣装、装飾品やしぐさなどによって意味を分節化しようとした。
- \* オランダの美術家ホーヘヴェルフ (G. J. Hoogewarff : 1884-1963) 「イコノロジーとキリスト教美術の体系的研究に対するその重要性」(1931)
  - ：イコノグラフィーとイコノロジーとの峻別
  - イコノグラフィー：テーマの分類 / イコノロジー：解釈と説明

#### 2 イコノロジーの方法

- \* パノフスキー (Erwin Panofsky : 1892-1968) 『イコノロジー研究』(1939)
  - ：芸術作品を解釈する三つのレベル
    - ：第1次的・自然的な主題：事実的主题 & 表出的主题：イコノグラフィー以前の記述  
ex. 作品に描かれた形や人物の表情の認知
    - ：第2次的・約定的な主題：イメージや寓意世界を構成：イコノグラフィー上の分析  
ex. 桃を手にした女性は「誠実」の擬人化、一定の配置で食卓についている人々を「最後の晩餐」と認める
    - ：本質的な内的意味・内容：イコノロジーによる分析  
国家、時代、階級、宗教的信条などからなる根本的原理を突き止めることによって把握される

#### 3 イコノロジーの批判：芸術的品质の欠如、芸術家の意図以上の解釈、個人的表現の軽視

### 五 絵画の記号論

#### 1 イコンとしての絵画：パースのイコン概念とコード

#### 2 コードの位相差：バルト的なコードのポリフォニー

この問題が、絵画の記号論の中心となる。この問題が、絵画の記号論の中心となる。